

「コロンビア切花の輸出

スペイン語学科4年

室谷 朋子

はじめに

ラテンアメリカの農業は現在、コーヒーやバナナといった伝統的農業から、それまでその地域では作られていなかったレタスやイチゴなど、先進国のさまざまなニーズに応えた非伝統的農業というものに変化している。南米の国「コロンビア」として「コーヒー」を連想する人は多いと思うが、現在この国でも切花の輸出が増えてきている。ではなぜ「コロンビア」で切花なのか。それには傷みやすい生花の輸出を可能にする国際空港の存在という地理的要因もある。しかし、もともと重要なのはかつては世界の生産国一位を占めていた「コーヒー」輸出経済の崩壊である。また、切花の輸出産業において、他のラテンアメリカとともに共通する労働条件などの問題もある。非伝統的農業は発展しているとはいえ、「コーヒー産業」と共通する問題は依然と続いている。

本稿では以上の点について検討する。

1 「コロンビア」の産業

八〇年代、ラテンアメリカ諸国は深刻な債務危機に陥た。「コロンビア」も例外ではなく、「コーヒー」価格の暴落も影響して、対外債務は二〇〇三年にもまだ三〇〇億ドルにのぼっている。一九八〇年代以前からの主な産業は「コーヒー」、石油生産などで、現在でも石油とその関連産業は全体の輸出構成の四分の一を占めていることがわかる(表2参照)。

とはいっても、その石油とその関連産業が安定した主要輸出産品になりうるかという点、そうとはいいがたい。表一から、GDPの成長はむしろマイナスといえることがわかる。これは、「コロンビア」の「ケリラ・グループ」が「コロンビア」政府の経済的安定を妨害するため、石油産業を標的にしており、石油採掘を安定させるためには武装「ケリラ」や先住民などを油田やガス田から一掃する必要があることも関係している。

また、農林水産業は二〇年でそれほど変化がないことがわかる。しかしながら、表二をみると「コーヒー」産業は一九八〇年代にくらべて明らかに衰退していることがわかる。そして他の産業が成長していることがわかり、そのなかで「切花」など、非伝統的農産物が増加していることが推測される。

2 なぜ「コーヒー」産業は衰退したのか

(一)「コーヒー」産業の発展

「コロンビア」の「コーヒー」は七八二年に「ベネズエラ」からオリノコ川流域地方、タバケのサンタテレサに伝えられ、その後、サンマルタリオアチャ等に広がった。

「コロンビア」で「コーヒー」の輸出が始まったのは八三五年のことである。一九二〇年代には農業分野の主要生産物になるとともに、輸出取引の五〇パーセント以上を稼いだ。しかし、さまざまな相場の低迷や品質問題などの諸問題が発生し、一九二八年には、「コロンビア」国立「コーヒー」連盟(FNC)が発足した。これは「コーヒー」生産者を代表する同業者組合であった。南米の「コーヒー」価格がピークに達したのは一九六〇年代後半

から一九七〇年代にかけてのことであり、「一ポンドあたり平均三ドル」であった。当時の「コロンビア」の「コーヒー」市場はFNCが調整していたためほとんどの「コーヒー」農家が利益を得ていた。その結果、「コーヒー」生産者は増加していった。しかし、そのような時代は長くは続かなかった。

(二)「コーヒー」経済の転機

一九八〇年代に入るとラテンアメリカ諸国では、「新自由主義」と呼ばれる経済モデルが推奨され、貿易自由化、外資規制緩和、公営企業の民営化等が実地された。

その影響は世界の「コーヒー」市場も免れず、八〇年代にはネスレやフィリップ・モリスなどの主要な多国籍企業が「コーヒー」をより低価格で買おうと競い合った。しかしこれは「コロンビア」には不利に作用した。なぜならば、「コロンビア」の「コーヒー」豆は水洗式アラビカ種と呼ばれるものであり、ブラジル等が生産する「ロスタ種」より高品質で味の良いものとされており、最も安い豆を買い付けることで利益を上げようとしていた多国籍企業の意にそぐわないものだからである。

「コーヒー」豆を生産する農家が急増したことも価格の下落に影響した。「コロンビア」の「コーヒー」生産者は一九七二年当時七五万戸から九〇万戸と推定されたが、「コーヒー」過剰供給が「コロンビア」で記録的なピークに達した一九九〇年半ばには二〇万戸以上の農家が廃業した。

(三)「コーヒー」産業の衰退

さらに、一九七三年の「ベトナム」和「バリ」協定締結後、安い「コーヒー」の生産者として「ベトナム」が出現してきた。「ベトナム」は気候が「コーヒー」生産に適しており、何よりその労働賃金の安さに世界中の「コーヒー」輸入国が注目した。一九九〇年に「ベトナム」は世界第二位の生産国「コロンビア」と肩を並べ、年間二〇〇万袋を生産する「コーヒー」生産地になった。そのため国際「コーヒー」価格は下落し、多国籍企業と「コーヒー」貿易関係者は記録的な利益を得た。その一方で「コーヒー」農家の貧困化は加速化した。「コーヒー」の価格は現在に至るまで低価格が続いている。

政府よりもFNCに価格規制や輸出量の調整を依存していた「コロンビア」の「コーヒー」産業は、多国籍企業の進出により、FNCは統制力を失

い弱体化した。その影響はFNCに依存していた「コーヒー」農家にも及んだ。

(四)「コーヒー」から切花へ

ネオリベリズムの経済モデルと世界的な供給過多により、「コロンビア」の「コーヒー」価格はその生産量と反比例して低下し、また、輸出の伸び悩みも顕著になった。

「コーヒー」の栽培可能面積は四〇〇万ヘクタール(一九七〇年)に及ぶとされているが、実際の生産面積は二〇〇万ヘクタールと推定される。「コロンビア」の「コーヒー」栽培は「ブラジル」と異なり、栽培適地が山地の傾斜部に限定されるため、大規模な機械化されたプランテーションが成立せず、営業規模の小さな「コーヒー」園が主体である。「コーヒー」園の数は三〇万余り、そのうちの九二パーセントが一〇ヘクタールまでの小規模農園であり、全国栽培面積の約六〇パーセントを占める。「コーヒー」産業では一年を通じて多くの労働力が必要とするが、雇用数は全般的な経済状況に左右される。そのため、「コロンビア」の全労働者の五パーセントから七、五パーセント、農業部門労働者の十九パーセントから三〇パーセントの間で大きく変動している(一九八〇年)。

FNCはそれまで海外市場を開拓すること
で「トリア」産業の保護と発展を図ってきたが、輸
出の低迷をまえに、非伝統輸出農産品への転作
を推奨するようになった。八〇年代には「コナ」や
熱帯果実、木材、酪農品等のほか、切花産業も
成長し始める。

3 つづいて切花はへんろれるようになったのが

(1)切花輸出が確立されるまで

「コロンビア」では三〇年前には、切花は、少数の
会社により国内むけに作られているにすぎな
かった。しかし一九六〇年代半ば過ぎから、切
花産業が拡大するにつれて、海外の市場に目が
向けられ始めた。一九六五年にはUSAIROUS
Agency International Development)から切花の
研究に詳しいアドバイザーが、輸出促進のために
「コロンビア」に來訪し、ボゴタにあるサバナが切花
生産の適地であるという判断を示した。そし
てその年、初めて「トリア」の「コロンビア」産生花が
二万ドルで輸出された。

「コロンビア」は生花を生産する上で、いくつが
の好条件に恵まれていた。安い労働賃金、栽培
に適した気象(日照時間、温度、肥沃な土壌)、

通年栽培、良い道路網、そして国際空港の存
在である。

さらに、一九六七年のパシホプランによって
提唱された信用税の物質的報奨金や、輸出促
進基金(PROEXPO)によって提供された貸
付制度、技術支援、市場サービスなどの商取引
上の利便性が加わり、これらが「コロンビア」の切花
産業を競争の激しい世界市場へと押し上げ、さ
らに高い利益を維持することになった。

(2)輸出の成功

「コロンビア」の切花の生産は、全体的に見て、成
功しているといえる。「コロンビア」で生産される切
花のうち、国内市場用に作られるのは全体の生
産量の五十パーセントである。残りはすべて輸
出ということになる。主な輸出先地域は北米
が八五パーセント(うちアメリカ合衆国が八パ
ーセント)と大半を占め、アメリカ合衆国第一位
の輸出国となっている。続いて「ヨーロッパ」が九パーセ
ント、その他が六パーセントである。ただし、米
国市場ではダンピング課税問題も発生しており、
欧州市場向け輸出の拡大や、日本を含む輸出
先の多角化が求められている。表三からもわか

るように、三五年前には二万ドルであった輸出
金額が二〇〇〇年には六億ドル近い金額の取
引をし、右肩上がりの成長を上げていることが
わかる。

今や「コロンビア」は世界の花卉貿易の二パーセ
ントを占めており、オランダに次いで世界で第二
位の輸出国であり、十パーセントのシェアを占め
ている。日本でも近年はカーネーションを「コロン
ビア」から輸入している。輸入は二〇〇四年度に
は三億円である。オランダ、韓国などを抜いて
マレーシアにいで第二位となっている。

生産されている花の品目はバラが二九パー
セント、カーネーションは一七パーセント、ミニカー
ネーションが九パーセント、キクが二パーセントで
ある。「コロンビア」の切花輸出が始まった一九六〇
年代末には、主に作られていたのはキクやカーネ
ーションであった。その後、栽培技術の向上、イン
フラ整備の結果、バラの生産がはじまり、一九九
六年には売上高でカーネーションを上回ることに
なる。現在では五〇種を超える花が生産されて
いる。

4 「コロンビア」の切花産業における問題点

(1)労働者と栽培地域

今日「コロンビア」では五〇〇を超える切花の栽
培・輸出業者が存在している。九〇パーセント近
い生花の栽培業者は都市周辺の農村地域にあ
る。このうちボゴタ高原のサバナには八五パーセ
ントが集中している。残りはリオネグロである。
農業経営には莫大な初期投資を必要とするに
もかわらず、その栽培面積は六五〇〇ヘクタ
ールを超える。また、栽培農家は四五〇戸以上
に達し、労働人口は、農家や加工者などの直接
労働者がおよそ九万四〇〇〇人、関連部門の労
働者がおよそ八万人である。

切花生産は労働集約的な産業である。八〇
年代には一ヘクタールにつき約三五人の労働者が
必要とされていたが、最近では自動水撒き機
や作付け機なども使われ始め、一ヘクタールに
き一五人程度とされている。そのほかに化学肥
料やピニルハウスの導入なども進み、雇用人数
が今後減っていく可能性は充分考えられる。

一方、労働者の平均学歴は低い。労働者の三〇
パーセントが初等教育を終了し、わずかに二〇パー
セントのみが中学を卒業している。切花の農園で
働くうえで、労働者はそれほどの知的能力を必

要とされない。区間ごとにおく管理者にはその
能力を必要とされる場合もあるが、それでも栽
培技術や算数、読み書きなどのいたって基本的な
知識でこ足りる。そのため、このことはさらに
農村地域で労働者を雇うことを容易にしてお
り、採用は現地で行われる。農村労働者はその
仕事量と従属性で企業に好まれているのである。

さらに、労働者の六七パーセントは二〇から三
九歳までで、大半が若い労働者である。その労働
者勤続年数は、一企業につき五、六年である。
農園の多くは午前六時に仕事が始まり、午後
三時ごろ終わる。しかし農繁期などは四時間ほ
ど伸びることもある。

(2)女性労働者

労働者の約六〇パーセントは女性である。花摘
み、掃除、選別や箱詰めなど、繊細さが要求され
る仕事は女性が担当し、インフラ整備や技術補助
などは男性が担当する。女性は安定して仕事を
こなすことで、賃金も男性より低いので好まれる。

しかし切花産業が女性にとって好ましい仕事
であるとは言い難い。彼女たちは低賃金で長時
間働いてピニルハウスの中での労働を強いられ、殺

虫剤に身をさらし、多くの場合労働者の基本的
権利も無視されている。一日一八時間労働を強
いる企業もある。
彼女たちのなかには頭痛を訴えるものもい
る。一般的には生花を育てている時に使われる化
学肥料や殺虫剤のせいだといわれている。しかし
社会安全保障局はこの問題は切花とは無関係で
あるとしている。

オランダでの研究では、生花産業でのいくつが
の化学薬品は中枢神経に長いことダメージを与
えると考えられ、そのような物質を長期間扱えば頭
痛や手に痛みを伴う。すべての花の背景には死
の影が存在するのである。

「コロンビア」でも健康基準が確定されたが、ほと
んど順守されず、「コロンビア」の切花産業の女性労
働者はリスクを負い続けている。病院には女性
労働者の多くが頭痛、吐き気、ピニルハウス内
の高温の環境と、多湿なために繁殖したカビや
バクテリアに伝染して引き起こす痙攣や失神の
症状を訴え、多くの女性が病院にやってくるが、
そのほとんどが皮膚やツメにふれた殺虫剤の毒
性によるものとも考えられている。

切花産業で働く女性の多くは一五歳から二

八歳で、二二パーセントの女性がシングルマザーである。彼女たちの多くが家族を支えるために働くなければならない女性たちだが、三五歳以上の女性は不当に解雇されることが多い。妊婦でさえも残業を強いられ、セクハラ・ハラスメントもある。法律ではそのような就労が一応禁じられてはいる。だがそのような不条理な条件下でも生活がかかっているために訴えられないのである。

(3) 子供の労働者

「ロンドニア」の法律では、二二・七歳の子供は彼らの健康・安全・精神を害さない限り就労できるとされている。つまり、切花産業においても企業は未成年者を雇うことができるのである。未成年就労者のうち、大半は二五・一七歳である。企業は直接未成年者に就労を働きかける。未成年就労者は学校の長期の休暇期間中に短期で働く場合が多い。中には労働時間の制限を決めないまま契約を結ぶケースもある。

未成年労働者は、生花農場、加工場のいたるところで働いている。さまざまな企業が子供に消毒の仕事をやらせている。しかし、これは違法で

ある。一方、農村では小さな頃から仕事を手伝うのが普通である。そのため切花産業で子供が働くことも当然のこととして受け入れられている。彼らは家計を助けるために、親と同じように辛い仕事をこなすのである。

(4) 期間労働者

切花産業では期間労働者が雇用の上で重要な位置を占めている。ASOCOLFLORES（花輸出業者協会）の調査によると、期間労働者は全体の二六パーセントとされている。しかしこの協会に属さない企業などとは、もっと高い割合で期間労働者を雇っていると思われる。なぜなら期間労働者・幹旋業者がいくつも存在しており、企業はこの幹旋業者を通して雇用をするからである。雇用者の中には、以前切花産業で働いて、もう一度この仕事に携わる労働者も多い。ひじの幹旋業者には常に二二〇～一四〇〇人もの期間労働者がいる。期間労働者をいつでも何人でも派遣できる体制が存在するのである。切花業者は期間労働者に法で定める最低の賃金と最低限の保障のみを与えればよい。正規の従業員を雇う場合でも、試用期間を定めて、安い賃金で働かせる業者も

ある。また、試用期間のみで解雇されてしまう労働者も存在する。

5 まとめ

「ロンドニア」の切花産業は非伝統的農業といわれる、比較的新しい農業形態である。これは一九八〇年代からラテンアメリカで顕著になってきたもので、それまで「コーヒー」やバナナなどを主に輸出してきた国々が、切花から養殖の魚、ワインまでさまざまなものを輸出するようになった。これによってラテンアメリカ諸国は外貨を獲得し、八〇年代に危機に陥った経済をなんとか立て直そうとしている。一方、先進国の国々は安くておいしいものを手に入れることができた。

では果たしてラテンアメリカの経済はこうした非伝統的農産物の輸出によって発展しているか。「ロンドニア」の「コーヒー」は八〇年代に危機に陥った。その理由のひとつに経済の自由化がある。それは現在でも続いている。切花が今後この自由主義経済のもとで発展を続けられるかという、基本的には見通しは暗い。現在では中国やベトナムやマダガスカル諸国も切花産業に進出

しつつあり、コーヒーの場合のシステムと同じく、資金の安い国々に先進国が目をつける可能性は十分に考えられる。

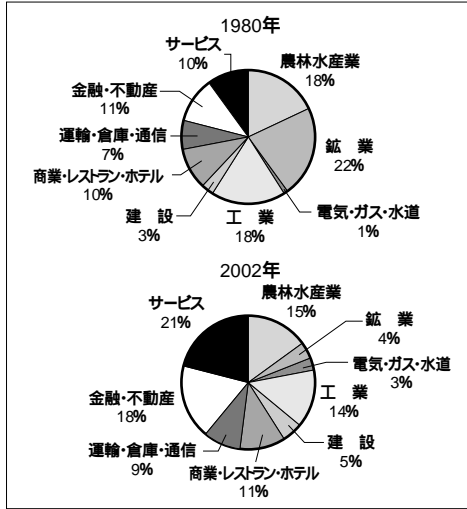
現在先進国ではグローバルizmのおかげで、発展途上国で生産されるさまざまなものを安く買えるようになり、その結果それらを大量に消費するようになっ。切花が嗜好品ではなく、日用品になる日も来るかもしれない。しかし問題はそれらを誰がどのような環境でどのように作っているかという点である。綺麗な花は「ロンドニア」の女性たちの子供たちの血の滲むような辛く労働と体を蝕むほどの化学薬品で作られているかもしれない。

参考文献

- ・財団法人世界経済情報サービス(ロイス)発行「ARCAポート2004」 「ロンドニア」 二〇〇四年
- ・大原美範編「「ロンドニア」特異な発展を遂げる」 科学新聞社出版 一九九五年
- ・Asociacion Colombia de Exportadores de Flores <http://www.asocolflores.org/site/ppal.php>
- ・International Coffee Organisation <http://www.ico.org/>
- ・Rose Trade and the Environment <http://www.american.edu/projects/mandala/>

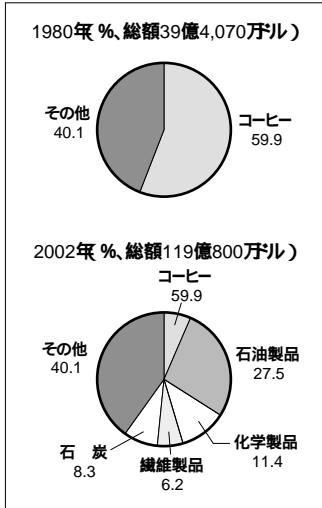
- TED/rose.htm
- ・全日本コーヒー協会 <http://coffee.aica.or.jp/top.html>
- ・FAOSTAT Database Collections <http://faostat.fao.org/faostat/collections/version=ext&hasbuk=0>
- ・Employment and working conditions in the Colombian flower industry <http://www.ilo.org/public/english/dialogue/sector/papers/workcob/>
- ・「ロンドニア」コーヒー政府 <http://www.jca.apc.org/kmasuoka/places/colcoffee.html>

表一 「ロンドニア」の産業構成比
(出所)Banco de la Republica, Julio de 2003



表二 「ロンドニア」の輸出構成

(出所)ECLAC : Anuario Estadístico de America Latina y el Caribe,2000
Banco de la Republica : Revista del Banco de la Republica, agosto de 2003



表三 輸出金額の推移(一〇〇〇万ドル)

(出所)ASOCOLFLORES System Department
よみ筆者作成

1965	20
1970	991
1975	19,504
1980	101,361
1985	140,778
1990	228,887
1995	475,783
2000	585,591